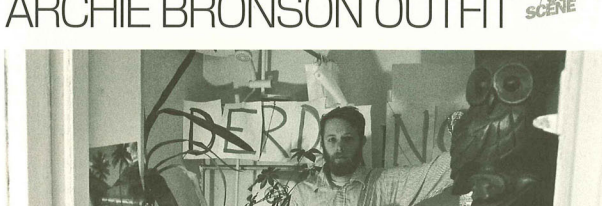
# ARCHIE BRONSON OUTFIT

RADIO COOKIE SCENE



**フランツ・フェルディナンドやアークティック・モンキーズを輩出し、UKきっての優良レーベルへと成長したドミノから、その品位を落としかねない変態ロック・トリオが出現！　奴らの名前はアーチー・ブロンソン・アウトフィット。官能小説を読み耽り、ガチョウと共にステージへ上がる、無精ヒゲの漢たち。靴音も高らかに、『ダーダン、ダーダン』で日本デビュー！　ブロンソンならこう言うね！（by みうらじゅん）**

質問作成、文／清水祐也　質問作成／伊藤英嗣　取材、翻訳／中谷なみ

■あなたたちのバンド名とビデ面は往年の名俳優チャールズ・ブロンソンへのオマージュなんでしょうか？
アーブ・クリーグランド（以下、A）：違うよ（笑）。そうじゃない。実際は、『バッファロー・ビル』っていう古いコミックから来てるんだ。人からもらったんだけどね。その中のカウボーイのイメージなんだよ。ウェスタンの変化に対応できなかったのさ。
■なるほど（笑）。さて、プレス資料によれば、メンバー3人は現在共同生活を営んでいるそうですが…。
A：サムは2ヶ月ほど前に引っ越していったばかりだけど、ほかにそれまではそうだったよ。これまで7、8年は一緒に住んでたかな。俺達はバンドをやってるよりも長い間、ずっと友達なんだよ。一緒に育ってきたんだ。それで一緒に住んで、バンドを転がして…。一緒にいるほうがむしろ自然なのさ。もう…18年ぐらいずっと友達かな？
■それで、同じような時期に、一緒に楽器を手にしたって感じですか？
A：そうだね。サムとドーはもうギターを弾いていたから、俺がドラムを叩くってことになったんだけど（笑）。だから、これが俺達の最初のバンドなんだよ。他のバンドでプレイしたことってないだ。ずっと一緒にプレイしてるのさ。
■そうなんですか。さらに、3人の他にもデューク・ガーウッドという“秘密のメンバー”がいるとのことですが。
A：うん。彼はクラリネットとテラクッテモロックのリード楽器をプレイしてるんだ。一緒に曲を書いたりしてるわけじゃないけど、ライヴでプレイしたり、アルバムに参加したりしてくれている。アルバム2枚とも参加してくれてるよ。曲を書く作業に参加してるわけではないし、元々フリー・ジャズ寄りの人だし…。同じように音からの友達なんだけどね。それに彼自身のバンドもあるしな。彼は俺達の“秘密兵器”みたいなものなのさ。だから、“秘密”のメンバーなんだよ。
■なるほど。“秘密のメンバー”って言いつつ名前はそちらへんとクレジットされてるので、何なのかな、と（笑）。正式メンバーになる予定は？
A：うーん…。アリかもね。まぁ、その時になったら考えるよ。でも、曲を書くのに既に十分なアイディアは出せているし、曲に関して3人でも延々と議論が絶くのに、ここに第三人目が加わるのはどうかなと思うけど（笑）。デュークとは上手くやれてるし、バンドの一部だとも思ってるけど、曲を書いたりする作業ではもう今のままで十分だと思ってはいる。彼は素晴らしいミュージシャンだと思うし、勝手に楽で好きにいろんなことやって、それが単純に上手く曲に乗るし、俺達は彼のパートに関しては信り考えなくてすむって、そのタンスがいいのかもしれないと思うけど。
■あなたたちはザ・ビート・アップやデューク・スピリットといったバンドのメンバーと同じアート・スクールに通っていたそうですが、どんな学生生活でしたか？
A：サムが行ったんだよ。全員が同じ学校に行ってたわけじゃない。でも、みんなロンドンの友達だけよ。特にデューク・スピリットはいい友達だね。新しいシングルの音源でサムとー緒に歌ってくれたりしてるし、何回か一緒にツアーをしたこともあるよ。レコード契約が決まる前から、ずっと一緒にライヴもしてたし。まそやりたいね。
■プレス用のアーティスト写真で、「エマニュエル夫人」を読んでいるのが笑えたんですが、言われてみればあなたたちのファースト・アルバムのタイトル『Fur』もザッヘル・マゾッホの小説『毛皮のヴィーナス』を連想させますし、デビュー・シングルのジャケットもちょっと卑猥な感じでしたよね？　こういったインモラルな小説があなた達の楽曲制作にも何らかのインスピレーションを与えているといえますか？
A：ジョルジュ・バタイユって作家の書いた『眼球譚』って本に衝撃を受けたんだよ。取説を半分ぐらい書いたところでこの本を読んだんだけど、「これって、俺の人生だ！」って思うような部分がたくさんあった。ダディズムの本だけどね。だから、「ダーダン、ダーダン」には、かなりそういう、性的なテーマが下地になってる部分が大きいんだ。素晴らしい本だよ。モラルなんて吹っ飛ぶよ。是非読んで欲しいね。
■以前ヴォーカルのサムがドライブに聴きたい曲として、梅林茂という日本人の作曲家の『夢二のテーマ』という曲を選んでいたのが気になったのですが、サムはどういうきっかけで彼のことを知ったのでしょう？
A：うーん、アイツがどうして知ったのかはわからないけど、デューク・ガーウッド（秘密兵器）は日本の音楽が好きだから、そういうところから聴いたのかもしれない。最近、あふりらんぽやポアダムズは聴いてるけどね。いろんな音楽が好きだし。必ずしも、俺達の音楽の中には見つけられないような要素を持つ音楽でもね（笑）。
■あなたたちの音楽は一聴するといわゆるガレージ・ロックのような印象も受けますが、ギターのリフやメロディからは、フェアポート・コンヴェンションのようなバンドや、さらに遡ってブリティッシュ・トラッドに通じる要素も感じられます。この要素に関してはどう思いますか？
A：君のところの編集者は音楽を良く知ってる人みたいだね（笑）。そういう音楽はみんな好きだし、ガレージ・ロックも、イギリスのフォーク・ミュージックも、みんな聴いてるよ。フェアポートも大好きなバンドさ。そういう要素を感じてもらえるのは嬉しいね。
■また、あなた達の音楽はブルースの特徴であるコアレーズの反復が基調となっていて、そのことが独特のグルーヴを生み出していると思います。
A：その通り。ブルースも大好きさ（笑）。余りたくさんのコードを使うのは好きじゃないんだ。例えば、『モダン・ラヴァーズ』はひとつしかコードを使ってない。もちろん、たくさんコードは知ってるよ（笑）。でも、限られたコードでいろんなメロディを足しながら曲を仕上げていくのが好きなんだ。
■もうひとつバンドの名前が出てるんですが（笑）。キャプテン・ビーフハートについてはどう思いますか？
A：彼らは俺のヒーローだよ（笑）！　伝説だしも。ちょっと変してやまないバンドさ。
■彼らはブルースを変容して素晴らしい音楽を生み出しましたよね。
A：うん、本当に素晴らしいバンドだし、大好きだよ。『セーフ・アズ・ミルク』は俺の永遠のベスト・アルバムさ。取材で「共演してみたい夢のバンドやアーティストは？」って訊かれたら、いつだって「キャプテン・ビーフハート」って答えてるくらいさ。彼はもう音楽をやめて砂漠で絵を描いてるからありえないけど、俺達も10枚くらいアルバムを出したら音楽を止めて、彼演で彼と一緒に絵を書き始めようかと思うよ（笑）。
■ブレス資料には、あなた達の音楽に“ベル・ウブを思わせるサムの緊迫したヴォーカル”“ソウルやスカンジナビアン・サイケ、ファウスト、サン・ハウス、ガレージ・クラブの影響が渾然一体となって存在するのが聴き取れる”などと書かれていますね。なるほど、と思いましたが、あなた達自身は今挙がったようなバンド/音楽が好きだったりしましたか？
A：うん、みんな好きだよ（笑）。スカンジナビアの…スウェーデンのバンドなんかも聴くよ。デュークの兄弟が好きで聴かせてもらったんだけど（笑）。パーソン・サウンドとか、素晴らしいバンドがいる。70年代のバンド。スカンジナビアのバンドじゃないけど、モンクスとかも好きだな。そういう音楽を融合させた音楽を意識して作りたいと思ってるわけじゃないけど、要素として働いっていて、自然に聞えてくるものかもしれないし。
■ちなみに、本誌の編集長は学生時代にやっていたバンドでファウストの「Giggy Smile」（1973年に出た『IV』収録）をカヴァーしたそうですが、あなたたちのアルバムの2曲目「キンク」のイントロのリフがその曲とよく似ていたので、思わずエア・ギターをプレイしてしまったそうです。この類似は偶然ですよね？
A：とダーダーダーダダダダー、ってあれね（笑）。意図したものじゃないけど、確かに自分達でも後で聞き返して、「あれ、ちょっと似てないか？」って思ってたんだ。でも、今まで誰にも指摘されたことはなかったんだけど（笑）。俺たちが思っては以上に、似てるのかな。君のところの編集長、口止めしなきゃいけないな（笑）。ウソだよ。でも、あのフレーズって、実はワーグナーの曲みたいなイメージでもあるんだよね。クラシックの、ファウストもそこから実はアイディアを拾ってきたのかもしれないと思うよ（笑）。
■さて、あなたたちはザ・キルズ、サンズ・アンド・ドーターズとどのようにツアーしてきたそうですが、彼らの音楽についてはどう思いますか？
A：ザ・キルズとはツアーはしたことはないけど、ジェイミーがファースト・アルバムをプロデュースしてくれたんだ。サンズ・アンド・ドーターズは友達さ。一緒にツアーをしたしね。どっちもバンドとしては素晴らしいバンドだよ。キルズにはすごくインスパイアされるし。
■共感を覚える同時代バンドはいますか？
A：今出たさっきの話題に、デューク・スピリットやパーチム…、パーチムも友達なんだけどね。ハード・ファイとか。
■タイトルの『ダーダン、ダーダン』って、どんな意味ですか？　アメリカン・コミックに出てくる擬音のようなものと理解すればよろしいのでしょうか？
A：この発音は、もっと、“ダダン、ダダーン”って感じに発音してもらいたいんだけど（笑）。言葉としての意味は何もない。無意味。ダダ的。でも、それを擬引下げるというんな意味が生まれてくる。
■3月に開催されるサウス・バイ・サウス・ウェストでも、アークティック・モンキーズといったバンドと一緒に“ドミニ・ナイト”へ出演することが決まっているそうですね。
A：それに、ペティー・レベットもね。彼女は元々60年代70年代に活躍してた人なんだけど、去年カムバックしたんだよ。それで彼女が、スペシャルゲストとして登場するんだ。すごく楽しみだよ。
■ドミニに関してはどう思いますか？
A：すごく成功してて、素晴らしいと思うよ。最初に契約したころは、小さなオフィスから引っ越したばかりで、そんなにスタッフもいなかったけど、今じゃヒットをたくさん出して、大きく成長していて素晴らしいと思うね。ローレンスはすごく個性的で音楽に情熱を持ってる人だし、それだけの価値がある男さ。
■ドミニ主宰者ローレンスの行き届いたパブで演奏しているところで彼の目にとまったそうですが、そのときのことを覚えていますか？　彼の第一印象は？
A：すごく良く覚えてるよ。どうやって会ったかって、いきさつは知ってる？　その日はそのパブのオーナーのバースデイ・パーティでね。俺達はそんなことと知らなくて、偶然そこで飲んでたんだ。その頃はメンバーが5人いたんだけど、5人全員がいてさ。で、ローレンスがその オーナーの友達で、たまたまそのパーティに来たんだよ。パーティが盛り上がった11時ぐらいに、何となく、俺達にもう曲ぐらいプレイさせてもらえないかって訊いたらOKだって言われたから、その場で2曲プレイしたんだ。『Riders』って曲なんかをね。そしたら、「すごく良かったよ」って、話しかけてきた訳がいて、しばらく話しながら、「君は何やってる人？」って訊いたら、ドミニのオーナーだって言うから、「ファック!!」って（笑）。それで2週間後には契約してたんだ。偶然の結果なんだよ。バンドの伝説とされている（笑）。
■すごく面白いですね。運命がそこに巡ってきたんでしょうね。ところで、あなたたちのウェブサイトのニュースに、“The Goose has been stolen!”と書いてありましたが、これはあなたたちが飼っていたガチョウが盗まれたということです？　そのガチョウはその後戻ってきたんでしょうか？
A：そう、盗まれた。どこかロンドンのアスホールの家に、今ないると思うよ（笑）。
■これって、本物の鳥のガチョウのことですか？
A：そう。鳥のガチョウ。パンドの紋章なんだ。ステージに一緒に登場することもあったんだよ。ずっとそうしてきたんだけど、今年の1月、ギグをしている間外に出ていたら、誰かに連れ去られてしまったんだ。ガチョウはすごく美しい鳥だけど、とても凶暴なんだ。ヴァイキングもガチョウを連れて戦に出たんだよ。敵がうっかりガチョウに近づいたら、翼で足の骨を叩き折られたりしたんだ。すごくスウィートで美しい鳥なのにね。俺達の音楽性にも、そういう部分を持っていたいと思うんだ。ジュントルなのに凶暴、みたいな。それに、俺達はスリーピースバンドだけど、ガチョウが話さずとさき、もし一羽が怪我をして飛べなくなったら、他の2羽のガチョウがその飛べない1羽を背負って飛ぶんだよ。そういう部分からも、俺達を象徴する鳥だと思っているんだ。

**アーチー・ブロンソン・アウトフィット**

**ダーダン、ダーダン**

CD

DOMINO / HOSTESS　WIGCD164J

アルバムのタイトルを聞いて、かって栄養ドリンクのCMで「ボヨヨン、ボヨヨン」という流行語を生んだ女子プロレスラー、レジー・ベネットのことを思い出してしまった…のは僕だけかもしれないが、とにかく、あのCMぐらい無意味（ダダ）で痛快なのが本作である。下ズボンでブルース・ロックを歌でながらのしかし歩く彼らは、一見無目的な枝し屋のようではあるが、胸元に“トラッド”な古臭いハンカチーフをポケットと呼ぶのさえ忘れていない。彼だと思った、フォーク・ギターの伴奏のみで歌われる、ラストの数え歌を聴いてみてほしい。イカすぜ、ブロンソン！（清水祐也）